

# KAED E

MAGAZINE



Photo by Yasutaka Tanji

東洋英和歴史館 第7回  
真つ直ぐでブレない慈母 加茂令子

KAED E People

カナダ観光局  
メディア・広報マネージャー 半藤将代さん

特集

## 花子と白蓮

SNHK連続テレビ小説で  
東洋英和が舞台に

# KA E D E

M A G A Z I N E

## 《表紙の言葉》

中高部にある小さな礼拝室。窓から差し込む光の中で静寂な空間が支配していた。片隅におかれた古いオルガンがその時代に導いてくれるに十分な雰囲気を感じさせてくれていた。歴史の重みと云うか気持ちの深いところを揺さぶる空間でもあった。

(メモリアルチャペル)



作家Profile

丹地 保堯(たんじ やすたか)

1943年生まれ。グラフィックデザイナーを経てフォトグラファーに。写真家としての評価はもちろん、布、和紙などに顔料を用いてプリントする「写真画」が国内外で高い評価を受けている。卒業生父兄。

[www.tanji-photo.com](http://www.tanji-photo.com)

## 聖書の言葉

「流れのほとりに植えられた木」 詩編 1:3

水の流れは地下深いところにあります。地表は渇いており、渇いた土地には木は育ちません。しかし、わずかな水流ですが、それは、地下深く流れています。

その流れが地表近くに現れると泉となります。その周囲は枯れ果てた荒野かもしれませんが、そこに木が育ちます。

鳥居坂教会 牧師 張田 眞

c o n t e n t s

特集

## 花子と白蓮 02

～NHK連続テレビ小説で東洋英和が舞台に～

東洋英和歴史館 第7回

## 真っ直ぐでブレない慈母 11

加茂令子

KAEDE People

## 半藤 将代さん 13

カナダ観光局 メディア・広報マネージャー

Event Report

## 東洋英和楓の会主催 15

パイプオルガンコンサート

Event・Report・Topics 16, 18

東洋英和楓の会からのお知らせ 17

HANAKO



特集

# 花子と白蓮

（NHK連続テレビ小説で東洋英和が舞台に）

BYAKUREN



この春、村岡花子の生涯をドラマ化したNHK連続テレビ小説「花子とアン」が始まります。花子は明治期の東洋英和卒業生であり、「赤毛のアン」の翻訳で知られる翻訳家・児童文学者です。花子が過ごした時代の東洋英和には、花子と生涯の友となる歌人・柳原白蓮やユニークな教員たちが在籍しており、ドラマの登場人物も彼女たちがモデルとなっています。

まだ女性の社会進出が認められていなかった明治・大正そして昭和の時代を、自立した個人として堂々と生き抜いた花子と白蓮。それを支えたのが東洋英和で培った友情、そして敬神奉仕の精神でした。そんな二人の人生を辿ってみました。

（協力）日本放送協会、赤毛のアン記念館、村岡花子文庫、宮崎路斐さん

# 英和で出逢った 二人の数奇な人生

村岡花子は日露戦争前年の明治36年、10歳の時に東洋英和女学校に入学しました。学費免除のかわりに、孤児院での奉仕活動が義務づけられる給費生の待遇です。クリスチャンの父親の願いで編入を許された花子は、寄宿舎生活を送りながら勉学に励むこととなります。

花子の関心の大半は、英語に向けられました。授業だけではものたりず、図書室にある英語の小説を片っ端から読みあさりまです。スコット、ディケンズ、サッカレー、C・プロンテ……と、英米文学の名作を次々に制覇。あまりに花子が文学に夢中なため、カナダ人婦人宣教師たち



東洋英和女学校卒業證書授与式・式次第。名簿の本科に柳原あき(白蓮)、安中はな(村岡花子)の名がある



は、花子が近代思想にかぶれやしなやかと監視の目を光らせたほど。

そんな女学校生活が5年を過ぎ、クラスにひとりの編入が入ってきました。23歳になる柳原燐子、後の歌人・柳原白蓮です。伯爵柳原前光の子として生まれた燐子は、15歳で華族女学校を中退して子爵家の長男と結婚、一子を産みますが、結婚生活に堪え切れず、逃げるような形で実家に帰ってきました。女学校入学は、体面を気にする家族からの厄介払いと、勉強を再開

村岡花子と柳原白蓮。貧しい茶商人の娘と、天皇家とも縁ある伯爵家の令嬢。出自を越えて結ばれた二人の友情は、終生続きました。明治、大正、昭和へと時代が移ろう中、時に運命に翻弄され、時にたくましく自ら道を切り開いてきた二人。互いの人生の傍らには、喜び、悲しみ、苦しみを分かち合う、腹心の友の存在があったのです。

したいという本人の希望を兼ねたものでした。

そうした過去はもちろん伏せられていますが、若くして人生の艱難辛苦を舐めた燐子の佇まいには、超然としたものがあり、ましてや抜きんでた美貌の持ち主。寄宿舎きつての文学少女だった花子は、憂いを湛えた年上の美しい燐子に胸をときめかせずにはいられなかったでしょう。燐子もまた、純真無垢で、自分のために英語の詩や小説を朗読してくれる8歳年下の花子を可愛く思ったに違いありません。二人は、「花ちゃん」「燐さま」と呼び合い、急速に親しくなっていくます。

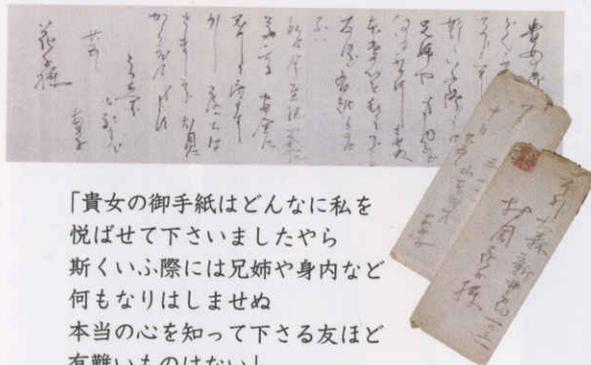
因習から解放された燐子は、シェイクスピア、聖書、ピアノを学び、自由でのびやかな日々を過ごしました。貧しい人たちへの炊き出しの手伝い、キリスト教的博愛主義や奉仕の精神にも目覚めます。佐佐木信綱の竹柏会に入門、本格的に短歌の勉強を始めたのもこの頃でした。

花子も燐子の誘いで竹柏会に通い、そこで片山廣子を紹介されました。花子に近代文学を教

花子と白蓮



「何が起っても、どんな場合にもあなたと私は『燦さま』と『花ちゃん』ですから、どうぞどこまでも一緒に行き度いと思ひます」  
(花子から白蓮に宛てた書簡より)



「貴女の御手紙はどんなに私を悦ばせて下さいましたやら斯くいふ際には兄姉や身内など何もなりはしませぬ本当の心を知って下さる友ほど有難いものはない」  
(白蓮から花子に宛てた書簡より)

え、翻訳の道へと導いてくれた才媛で、自身も後にアイルランド文学の翻訳で有名になります。

燦子が夫の伊藤伝右衛門への絶縁状を新聞に公表し、恋人の宮崎龍介と駆け落ちした—いわゆる「白蓮事件」が世間を騒がせたのは、大正10年のこと。花子はすでに結婚し、作家の道を歩み始め、前年には男児を出産していました。福岡の

炭鉱王に嫁いだ燦子とは手紙で交流を続けていましたが、花子は父親のような歳の男と再婚する燦子に対して、わだかまりを抱いていました。なぜ、愛のない結婚をするのか…。しかし、燦子には燦子の考えがありました。夫の慈善事業を通じて社会奉仕の活動がしたい、と。

しかし、嫁いだ家に居場所はなく、慈善事業

東洋英和女学校卒業写真 1910(明治43)年3月。  
上から2列目の右端が白蓮、左端が村岡花子



に関われる余地もなく、燦子に許されたのは、何不自由ない贅沢な暮らしの中で、人形妻として生きること。

そんな燦子の突然の出奔。時代的にはまさに命がけの恋です。燦子の勇氣と覚悟に激しく揺さぶられ、花子は親友のもとに駆けつけます。10年ぶりの再会でした。

その後の二人の人生は、不思議と重なり合うような軌跡を描きます。夫が苦境に陥ればベンで一家を支え、息子を失う悲劇に碎かれた時は、社会の中に自らの使命(ミッション)を見出し、再生の道を進んでゆく。花子は家庭文学で若い世代たちの心に灯をともし、白蓮は全国各地で世界平和を訴えながら、戦後の日本を生き抜いていきました。

花子は、東洋英和で受けた「民主的で自主性のある教育」が、自分の考え方の根底をなしている」と述懐しています。女性がまだ不自由だった時代、精神的に自立し、家族を愛し、社会に目を向けて行動した花子と白蓮。女性の社会進出が当たり前となった平成の時代の今、二人の生き方は、普遍的なロールモデルになったといえるのではないのでしょうか。◆

いよいよ放送開始!

NHK連続テレビ小説

『花子とアン』を

楽しむための

人物ガイド

村岡花子をモデルにしたNHK連続テレビ小説「花子とアン」がはじまります。ドラマの舞台となる「修和女学校」は東洋英和がモデルです。花子の親友として「葉山蓮子（柳原白蓮がモデル）」も登場します。明治時代のミッションスクールがどのように描かれるのか興味深いですね。

3月31日からの放送に先駆けて、少しだけ「花子とアン」をご紹介します。題して、KAEDEMagazine版『花子とアン』を楽しむための人物ガイド。そうそう、ナレーションは、なんと美輪明宏さんとのこと。ますます楽しみです。



◆安東はな(村岡花子) 吉高由里子

小さい頃から空想好きな少女。10歳で東京の女学校に入学し、英米文学に親しむ。教師、編集者を経て結婚し、翻訳家・児童文学者の道へ。

東京 修和女学校

◆…東洋英和ゆかりの人物がモデル

◆生涯の友・葉山蓮子 仲間由紀恵

花子より8歳上の伯爵家の娘。15歳で結婚したが、実家に戻り、23歳で女学校に編入。花子と親しくなるが、政略結婚のため福岡に嫁ぐことに。

政略結婚

二番目の夫

年下の青年

恋

友情

◆同級生・醍醐亜矢子 高梨臨

寄宿舎で同室に。貿易会社の社長の娘。初め、花子は劣等感を抱くも、やがて親しい友人に。

◆寮母・茂木のり子 浅田美代子

寄宿舎のベテラン寮母。没落士族の娘で、裁縫や礼儀作法を教えている。あかるくおおらかな性格で、ホームシックになった花子を励ます。東洋英和ゆかりの先生がモデルです。

◆英語教師・富山タキ ともさかりえ

カナダ人校長の通訳も務める英語教師。厳格な指導で生徒たちから恐れられる存在だが、花子が翻訳家という仕事を意識するきっかけにも。

◆夫・村岡英治 鈴木亮平

印刷会社の息子。女学校時代に花子と知り合う。出版社で働く花子と再会した時、結婚していたが、恋に落ち、苦しみを乗り越えて結ばれる。

恋



2013年09月18日、NHK放送センターで「花子とアン」の出演者発表と記者会見が行われ、14人の出演者が今回のドラマへの抱負を語りました。

そして、10月下旬には花子の郷里である山梨県内でクランクイン。現在もスタジオを中心に撮影が進んでいます。放送開始は間もなくです!

# 甲府 安東家

あこがれ

仲が悪い

## 祖父・安東周造 石橋蓮司

ふじの実父で花子の祖父。小作農家の主。口数は少ないが、孫たちのことをかわいがっている。

## 兄・安東吉太郎 賀来賢人

1つ上の兄。苦しい家計を支えるため、8歳で奉公に出る。家族思いだが、花子に複雑な思いも。

## 父・安東吉平 伊原剛志

新しいもの好きで夢追い人。行商のかたわら社会運動にかかわったりして、家族を困らせている。花子に夢を託し、東京の女学校に編入させる。

## 母・安東ふじ 室井滋

自由人の夫に振り回されながらも、生来の明るさで家庭を切り盛りする。読み書きができないが、花子の女学校編入に反対する祖父を説得する。

## 妹・安東かよ 黒木華

2つ下の妹。女学校に進んだ花子に憧れるが、小学校を出てから製糸工場に住み込みで働く。

関心

## 地主・徳丸甚之介 カンニング竹山

安東家の田畑の地主。花子の小学校の同級生の父。ふじの幼なじみで、ふじに関心がある。

## 妹・安東もも 土屋太鳳

6つ下の妹。花子に子守をされて育った。朝市に思いを寄せるようになるが、北海道の農家に嫁ぐ。

## 『アンのゆりかご — 村岡花子の生涯 —』 村岡恵理[著]

ドラマの原案となった、村岡花子の孫・村岡恵理氏による評伝。東洋英和女学校で英語を学び、翻訳で身を立て、苦勞の末に『赤毛のアン』を世に送り出した村岡花子の人生が魅力的に綴られていく。柳原白蓮をはじめ多くの女流作家との交流は、明治から昭和にかけての激動期を生きた女性たちの姿を浮き彫りにし、興味深い。夫婦愛や家族愛などの心温まるエピソードも満載。



文庫判・新潮社刊  
788円(税込)



新書判・マガジンハウス刊  
1995円(税込)

## 甲府 木場家

恋

### 朝市の母・木場リン 松本明子

気さくな性格でおしゃべり好き。周造のよき話し相手。ふじとも仲がよいが、吉平には批判的。

### 幼なじみ・木場朝市 窪田正孝

安東家の隣の農家の息子で、花子の小学校の同級生。子どもの頃から花子を思い続けている。

NHK平成26年度前期  
連続テレビ小説『花子とアン』  
原案:村岡恵理『アンのゆりかご 村岡花子の生涯』  
脚本:中園ミホ 音楽:梶浦由記  
放送:2014年3月31日(月)～9月27日(土)全156回(予定)



花子  
赤毛のアンとの出会い

## 東洋英和との関わり

どんな境遇でも、勇気と優しさを持って前向きに生きれば、誰からも愛される存在になれる。

1歳になる前に祖母・花子と別れた村岡恵理さんは、生前のまま遺された

書齋に並ぶ祖母の作品からそんなメッセージを感じ取っていた

という。心を豊かにする、良質な家庭文学を子供たちへ届けることに生涯を捧げた村岡花子。とりわけ『赤毛のアン』は、特別な一冊だった。戦争で帰国する友人のカナダ人宣教師から原

書を手渡された花子は、英語が敵性語とされた戦時下で秘かに翻訳を進め、空襲警報が鳴ると書きかけの原稿と原書を抱いて避難した。

「そんな危険を冒してまで、一冊の本を翻訳しつづけた祖母の思いとは何だったのか。それを知りたくて調べ始めたことが、祖母の評伝執筆にいたる大きなきっかけでした」

花子の生い立ちを遡ると、何かの導きかと思えるような東洋

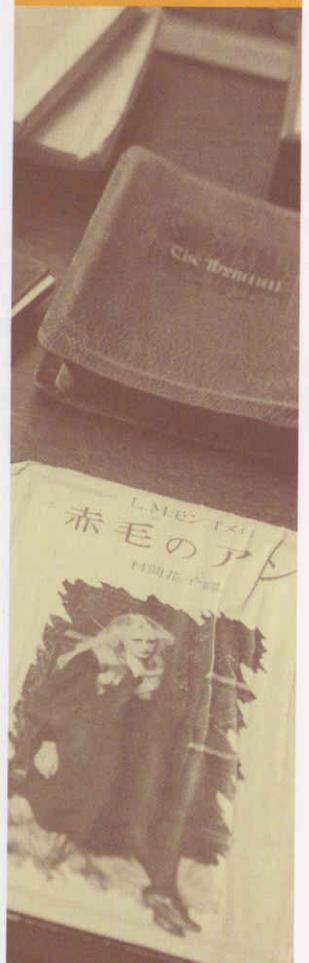


村岡恵理さん

86年高等部卒業。ライター、作家。

著書:「アンのゆりかごー村岡花子の生涯ー」、  
「村岡花子と赤毛のアンの世界」(責任編集)

HANAKO



英和との関わりがあった。花子の父親が故郷静岡でカナダ・メソジスト派の宣教師と出会い、その流れで山梨に移り住み、結婚して花子が生まれたこと。2歳の花子に洗礼を受けた甲府教会の牧師が、東洋英和女学校の創設者の一人であったこと。そして、その繋がりに東洋英和に編入し、そこで受けたキリスト教に基づく情操教育、英語教育が花子の人生を決定づけた。

「もっと言えば、東洋英和に学ばなければ、祖母は私たちが知る、あの村岡花子になりえなかったと思います。東洋英和の教育は、高い教養と知性を身につけた家庭婦人を育てることを



東洋英和在学中のメモノート(左中)、ミス・ブラックモアからプレゼントされ自分のサインを入れなおした書籍(下)



恵理さんは姉・美枝さん(右)と共に記念館を運営している



花子の夫が印刷業だったことから残っている東洋英和のスクールソングを印刷した鉛版(下)

## アンと出会えた幸運

目指していました。歌人であり、また良家の奥様でありながら、祖母に翻訳の手引きをした片山廣子などがその典型です。祖母は裕福な生まれではないし、職業婦人として身を立てなければなりませんでしたが、表に出なくても教養ある優れた女性たちのこと、祖母のリベラルでバランス感覚のあるものの考え方は、東洋英和であったからこそ培われたものだと思うのです」

花子を花子たらしめたものは、社会との対峙の中にも見出せる。貧困があまねく存在し、教育の機会が誰にも平等に与えられなかった時代。花子もまた、自分のために教育を受けられなかった弟妹たちの重い犠牲を背負っていた。時勢が軍国主義へと傾く中、女性の地位や権利は一向に顧みられず、花子は婦人参政権運動など社会活動に関わった。

「祖母の仕事の核にあったのは、女性や子供が尊重される平等な社会をつくること。そのために、将来を担う青少年少女に夢を与え、情操を育む健全な児童文学を提供することが必要だと考えていたのです。それは、児童文学がまだ女子供の読み物と軽視されていた時代から、祖母が言い続けてきたことでした」

花子がアンと出会ったのは46歳の時。その人生を俯瞰すれば、まさに運命的で時宜を得た出会いというよりほかはない。

「祖母は驚いたでしょうね。物語の中でアンが体験する学校生活は、自分の寄宿舎生活とそっくりだったから。アンが憧れたパフスリーブのドレスは、衣擦れの音までリアルによりみがえってきただろうし、『歓喜の白路』の場面では、鳥居坂の桜並木を

思い浮かべたはず。それ以上に、作者モンゴメリと同世代のカナダ人宣教師たちによる教育を母校で受けていたことに、不思議な巡り合わせを感じていたと思います。出会いから13年後、アンは祖母の手によって日本に紹介されました。美人ではないけれど、開放的でエネルギー溢れるアンは、戦後の民主的な社会にふさわしいヒロインでした。満を持して『赤毛のアン』が出版され、今も多くの人々に読み継がれていることに、作品の持つ生命力と、アンと出会えた祖母の人生の幸運、そしてその原点である東洋英和の恩恵を思わずにはいられません」



花子の残した数々の貴重な資料



「赤毛のアン記念館 村岡花子文庫」として、現在も当時のまま保存されている花子の書斎(現在は休館中)

# 白蓮 晩年の居宅を訪ねて

BYAKUREN



## 母・白蓮との思い出

都心の一角にある閑静な住宅街に、柳原白蓮が暮らした家がある。九州の家を出奔後、実家に戻った白蓮は、幽閉生活の中で



宮崎龍介との長男香織を出産。翌年、関東大震災の混乱に乗じて宮崎家に入り、家族3人の暮らしが叶うのだが、それから亡くなるまでの45年間暮らし続けた家である。現在は長女の宮崎路斐さんと、その長男一家が住まわれており、松の大木が見下ろす日本家屋の中には、白蓮が残した遺品が大切に保管されていた。

「母はさっぱりした人でしたね。あまり物事にこだわるようなところはありませんでした」

白蓮の写真を前に、そう話を切り出した路斐さんは、1925年生まれで、香織の3歳下。幼い路斐さんを抱いて微笑む白蓮に、以前のような寂しげな面影はない。

出奔騒動の余波は大きかった。世間の非難の声に兄は貴族院議員を引責辞任し、白蓮は華族を除籍される。もちろん生活も、かつての「お姫様」暮らしから一変した。龍介が結核で病床に臥してしまい、一家の収入は白蓮の執筆活動に頼ることになっ

たのだ。小説、戯曲、随筆。頼まれた原稿は何でも引き受けた。

「私が小学生になる頃には、父も元気になったのですが、母は相変わらず忙しく暮らしていました。講演や座談会で出かけることも多くて、『今日はウチにいるかしら?』と思いつながら、学校から帰ったりしていました。母は文筆の仕事が本当に好きで、生き甲斐だったと思います」

家庭的ではなく、料理もできない。言葉遣いには厳しかったが、勉強をよく見てくれた。夏休みの家族旅行は蓼科で過ごし、母とずっと一緒にいられて楽しかった。と、路斐さんは母・白蓮との思い出を語ってくれた。父とは対等な関係で仲が良く、夫婦の会話は、その晩のおかずのことよりも政治や社会の話が中心だったという。なんだか昭和のインテリ家庭の風景が見えてくるようだ。

龍介の父・宮崎滔天と盟友関係にあった孫文との繋がりがから、宮崎家では中国人留学生をよく預かっていた。そのほかに居候もいて、白蓮は義母のツチと一緒に彼らの世話をしたという。また、娼娼運動に関わり、吉原から逃げてきた女性を匿うこともあった。困っている人、社会の中で虐げられている者を放っておけないという同情心は、生涯変わらない白蓮の美質であった。

都心のビルの谷間に佇む宮崎邸。現在は白蓮の孫・黄石さんの表札がかかっている





いまでも大切に保管されている数々のゆかりの品

「人の出入りが多くて、賑やかな家でした。母は、宮崎の家に来て良かったとよく言っていました。昔のことは多くを語らない母でしたが、九州にいた頃は本当に辛くて、何度川に飛び込もうと思ったかわからないと話していました。父と一緒になつてからの母の人生は、本当に幸せだったと思います」

### 長男の死から平和運動へ

因習に苦しめられ、波乱続きだった前半生に対して、白蓮の後半生は、概ね穏やかで充実したものだったといえるだろう。ただ一つ、香織の死を除いては。

白蓮の影響で文学青年だった香織は、早稲田大学在学中に学徒出陣で陸軍に入隊。終戦の勅令が下り、9月に入ってから、鹿児島で空襲により戦死したという知らせが電報で届いた。終戦の4日前のことだったという。

「母はただただ呆然としていました。つらい戦争がようやく終わって、みんなで兄の帰りを今か今かと待っている時だったのです。信じられない思いで一杯だったのでしょう」

耐えがたいほどの悲しみを乗り越え、翌年白蓮は、戦争で子供を亡くした母親たちに呼びかけ、「悲母の会」を結成した。この会は後に「世界連邦」へと発展、白蓮は婦人部の中心として日本全国を回り、戦争廃絶と平和



への願いを訴えた。

晩年、緑内障で目が見えなくなるまで、白蓮は精力的に活動を続けた。そして1967年、夫の龍介と露荻さん家族に見守られ、81歳で安らかにその生涯を終えた。

宮崎家の床の間に一体の人形が置かれている。九州の家に持つていくために、白蓮が実家にあつた人形を写して作らせ



宮崎露荻さん。左は大切に保存されているみどり丸

たもので、名前を「みどり丸」という。「母は伊藤家に行く時、みどり丸が自分を呼び戻すような気がしていたそうです」と露荻さん。実際には、白蓮が家を出た後でみどり丸は戻された。長い年月を経て傷んでしまったみどり丸を、露荻さんは修復に出した。人形師の手によって蘇ったみどり丸は、白蓮がそばに置いて大切にしていた頃と同じ愛らしい姿を見せている。◆

# 真つ直ぐでブレない慈母 加茂令子

## 新

緑眩しい鳥居坂をふくよかな若い女性が上ってくる。時は明治27年

(1894)6月。東洋英和女学校に裁縫教師の職を得た23歳の加茂令子である。

のちに寄宿舎取締(舎監)となって、東洋英和になくはならない存在となるのだが、このときの令子の表情は、必ずしも晴れ晴れとしたものではなかった。彼女の心の声に耳を傾けたなら(よくは知らないけどさ、あたしや、どうもキリスト教は好かないね)というつぶやきが聞こえたかもしれない。西洋人教師に交じって働くことにも躊躇う気持ちがあったようだ。

## 加

茂令子は明治4年、房州北条(千葉県館山市)に士族の長女として

生まれた。父親が家禄奉還金(武士の身分を離れる退職金みたいなもの)を子どもたちに分け与えたので、令子はそれを学費として東京に出、ふたつの裁縫学校に学んで洋裁、和裁の技術を身につけた。旧藩主の家に奉公に上がり、姫君に裁縫を教えたが、小学校教員の資格を取り、5年務めたところで、東洋英和の裁縫教師に転じたのである。

歯切れの良い真つ直ぐな性格で「あたしやさ、100点の子より95点の子のほうが可愛いよ」しゃつきりした言葉が似合う女性だった。その令子が「ごきげんよう」のお嬢様学校なのである。ところが、これが不思議と水に合った。裁縫学校の寄宿舎からは空気が合わないと思



加茂令子

から退散した令子だったが、東洋英和では「職員が：いずれも熱心に誠実に、その任務に当たっておられ、学校全体の気分は、かつて私が経験したことのない清らかさと和やかさに充たされておりました。：許されるならば、此処こそ我が生涯を託すべき地であると」確信したと後に記している。





J.K.マンロー



1932年に竣工した青楓寮(室内、食堂)

キリスト教嫌いはただの食わず嫌いであつたようで、明治30年に受洗、

入信。外国人教師たちの生徒への愛情深い接し方にも感銘を受け、鳥居坂を初めて上ってきたときの心のさざ波はたちまち霧消することとなる。

奉職の翌年、寄宿舎に移り、そのまた翌年4月には早くも舎監に任じられている。令子、弱冠25歳。時の校長、ミス・マンローに指名されたとき「高等教育を受けていない私ごときが」と固辞したが「舎監は常識の人でなければなりません。理事会一致で推薦する故、曲げてお受けくださるよう」。ミス・マンローは令子の資質を見抜いていた。令子が芯の通つた、まっとうな常識の持ち主であることを、14歳で親元を離れ、苦労からの

貴重な体験もしている。しかも、切れるような頭の良さがあつた。

### 以

来、昭和11年(1936)に65歳で退職するまで、足かけ42年間にわたつて舎監を務め、1000人を超える寄宿生を送り出した。その中には、このコラムにすでに登場させた柳原燐子(白蓮)も村岡花子もいる。23歳の燐子や15歳の花子のように長じて寄宿舎に入る生徒もいたが、10歳に満たない年齢で親元を離れ、寄宿する子供もいた。そうした子たちの母親役をも担うのだから、大変である。卒業時には、どこに出ても恥ずかしくない、自立した人格として送り出すのである。

立ち居振る舞い、言葉遣いなど「そんなことはお嬢様のなさることではござい



I.S.ブラックモア帰国の際寄宿舎にいた教員(右から3人目が加茂)

ませんよ」と厳しく指導し、規則正しい生活のなかで自己の責任観念を自覚させ、徹底的な物事の整頓や洗濯、足袋継ぎ、障子張りなど、身の回りのこと的一切を親身になって身につけさせたのである。裁縫教師としても有能だったが、舎監としても際立っていた。厳しかったけれど、それ以上に優しくかった。

多くの卒業生が「学校であつて家庭でもある英和の寄宿舎」と懐かしむのは、ふくよかな慈母、加茂令子の真っ直ぐでブレない視線に守られた、寄宿舎の自由な空気がそう言わせたのではないだろうか。★

参考：『東洋英和女学校五十年史』『東洋英和女学院百年史』  
『目で見る 東洋英和女学院の110年』

# 人に対する信頼と 変わらないことを 大切にする価値観

カナダ観光局  
メディア・広報マネージャー

半藤将代さん



異なる人をもそのまま受け入れる  
カナダの寛容さ

『赤毛のアン』の舞台であるカナダのプリンス・エドワード島。美しい自然や人々の素朴な生活に憧れて、日本からも多くのファンが訪れる。観光PRとしてカナダの魅力を紹介する半藤将代さんにとっても、「アン」は外せないコンテンツだという。

「日本の女性にアンが人気なのは、物語の魅力に加え、季節感溢れる風景や暮らしの描写に共感できるからじゃないでしょうか。プリンス・エドワード島は、まさにアンの世界そのもの。最近、あえて男性ライターに取材してもらったりして、たとえばアンを読んだことがない人にも興味を持ってもらえるよう、新しい切り口でイメージを広げていきたいと考えています」

大学の卒業旅行でヨーロッパを旅行し、海外の異文化に興味を持ったという半藤さん。帰国後、在学中からアルバイトをしていた編集会社に就職し、トラベルライターになった。取材で世界各国を回ったが、カナダとの初めての接点は、新聞社主催の恐竜博にスタッフとして関わったことだった。

「カナダにも行きました。その時に訪れたのは、雪原が続く田舎で、住んでいる人がいい人たちばかりだったことが印象

に残りました。でもどちらかというと混沌とした都市が好きだった私には、その時はピンと来ませんでした」

その後、アメリカIT企業で3年間働いた後、現職に就く。半藤さん曰く、「縁あつて」再びカナダの仕事に携わることになったが、そこで初めてカルチャーショックを受けたという。それは、カナダ人のものの考え方、価値観だ。

「ビジネスにとって何が大事かをカナダ人スタッフとミーティングで話していたときのことです。彼らから出てきたのは、人間性、相互理解、尊敬、そして妥協という言葉。驚きました。それまでアメリカ企業において、何が重視されていたかという点、生産性の向上や競争力、スピードやリーダーシップとか。妥協なんてありません。今なら、カナダの価値観はビジネスの世界でも重要な基盤として評価されており、実際に成果を生むためにも大切だとわかりますが、15年前は日本企業でもアメリカ的なビジネス観に引っぱられていました。私自身もアメリカナイズされていて、カナダは遅れていると思ったくらいでした」

移民が多く、モザイク国家と呼ばれるカナダは、多様性を尊重し、共生志向が強い。二カ国語政策をとっており、連邦政府の仕事をするときは、英仏語両方の



大学時代



ライター時代



カナダにて



バンクーバー冬季オリンピックの準備ミーティングで  
カナダ観光局各国PRスタッフと

はんどう まさよ

カナダ観光局 メディア・広報マネージャー



1986年高等部卒。早稲田大学第一文学部を卒業後、トラベルライター、企画編集を経て、グローバル企業でマーケティング・コミュニケーションを担当。99年よりカナダ観光局メディア・広報マネージャー。カナダ各地の魅力や文化を日本に紹介する他、テレビや新聞などのマスコミ取材をアレンジ。2017年のカナダ建国150周年に向けた特別プロジェクトを立ち上げて様々な企画を準備中。

[www.keepexploring.jp](http://www.keepexploring.jp)

書類やスタッフを用意しなければならぬという。効率やコストを考えれば当然負担になるが、それを良しとしている。文化や言語、宗教や民族など異なる人たちが異なるまま共存する社会をつくっていくことを強みとして考える。それがカナダという国なのだという。

「カナダにいますと、プレッシャーゼロなんです。そのままの自分で100%受け入れられていると感じられる。寛容さに関して、すごく能力の高い国だと思う。私にとってカナダの魅力はまさにそこで、ドラマチックで刺激的なことが次々起こるわけじゃないけれど、そこにいることが心地良い。大らかで自由で、生きていることが楽しいと思えるんです」

### 英和によってつながり合う 不思議な縁

中高と在籍した東洋英和では、英語劇部に所属。シエークスピアが中心だが、楓祭ではミュージカルにも挑戦した。聖書を勉強したり、礼拝でハレルヤを歌ったり、西洋文化の基盤に日常的に接していたことが、海外で仕事をすすめるうえで役にたったという。「上司に『カナダ人も使わないような難しい言葉を知っているね』と言われたときは、英和のおかげかなと思いました」

それ以上に半藤さんが感じるのは、カナダと自分の縁が英和に入学したときからつながっていたのではないかという思

いだ。そのことを強く意識したのは、2008年に『赤毛のアン』出版100周年で母校を訪ねたときだった。

「先生方が昔と変わらずに温かく迎えてくださって。私なんか授業中におしゃべりして立たされるような生徒でした。それこそ英和の寛容さに助けられて、そのありがたみにも気づかずに卒業して行った生徒なのに。懐かしさが込み上げてくると同時に、自分がそこにいられることに誇りを感じたんです。今の私の人生は、英和からずっとつながっていたんだなって。そして、そこに帰る機会を与えてくれたのが、『赤毛のアン』で一緒に仕事をした同級生の村岡恵理さんでした」

因みに英和への入学を勧めたのは母親

だった。アン、カナダ、東洋英和。どれも自ら意識して選んだものではない。さまざまな人たちの愛情や献身により、巡り巡ってもたらされたものであることに気づいた。自分が役にたてることがあれば、感謝を込めて精一杯お返ししたい。今年3月から開催される「赤毛のアン展」は、母校とカナダの交流を深めるための良い機会だと半藤さんは考えている。

「東洋英和には、カナダと通じるものがあると思います。1つは人に対する信頼、もう1つは変わらないことを大切にしている価値観です。それは、これからもずっと続いてほしい。そのために、さまざまな形でカナダとの交流のお手伝いができるばいと思います」